

鋤くわと鉛筆とステイック

二〇二一年の秋から、本格的に愛媛と東京の二拠点生活をスタートさせた。実家周辺の耕作放棄地で仲間たちと農業を始めたことがきっかけだったが、東京での執筆生活への反動でもあっただろう。この十年の間に文筆の仕事が増え、月の連載だけでも五本以上になっていた。部屋に籠こもり書く日々は、知らず知らずのうちに私の中の風を弱めてしまっていた。気分転換に小さな庭を耕し種を蒔き、野菜を育てたり花を愛でることを続けたが、何かが足りなかった。かといって、街を走る気にはなれないし、ジムやヨガ教室に行くのもどうも向かない。

ひよんなことから、実家の近所の人が手放そうとしていた農地を仲間たちと管理することになった。ふと見上げた空が広い。畑には鳥がやってくる。すぐそばを猿が走り、虫が地面をはう。サバンナに行かずとも、人間以外の生物の方が圧倒的に多いことに気づく。そして、宇宙旅行へ行かずとも、太陽や土から栄養をもらって、私達は存在しているのだと分かる。夕方には、くったくたのへろへろになって家へ帰り、ご

飯を食べ、風呂に入り、そこから執筆しようとするも三秒で落ちてしまうのだった。高校時代の部活に匹敵する疲れだが、あの頃と違うのは、翌朝目覚めても私の充電は七割くらいしか回復していないということだった。それでも、太陽とともに起き、働き、食べ、寝るというルーティンは心のシワを伸ばしていった。

農家の子どもだから農業はお手の物、というわけでもない。どんな仕事もそうだと思うけれど、手伝いで作るのと自分主導で作るのとは違う。土作りに始まり、種を蒔く時期や、芽かき方法、肥料の種類……野菜によって違うそれらを、母や近所の先輩に教えてもらったり、本を読んだりしながら、奥へ奥へと分け入る。

私達は、猿が嫌いな野菜ばかりを育てている。ジャガイモは食べるけど、里芋や山芋、菊芋は食べない。玉ねぎやネギは食べるけど、生姜やにんにくは食べない。トマトやかぼちゃは食べるけどピーマンやほうれん草は食べない。なるほど、子どもが嫌いそうな野菜がダメなんだな。よっしゃ、徹底的に嫌いなものばかり育ててやろうじゃない！ 畑に行くと、すぐ裏の竹藪に住む猿の群れが「ウキーー！」「キヤキヤー」と威嚇（いかく）してくる。私達もそれに対抗するように「ウキヤー」「キキヤー」と声を張り上げる。このやり取りが、そのうち会話にならないかしら——。

猿「この葡萄（ぶどう）もらつていいですか？」

私「いいよ。でも一口食べて捨てないで、ちゃんと全部食べて他のは置いといてね」

猿は、みかんでも葡萄でも、一口齧ったらぽいと捨ててまた新しい実を取るから被害が広がる。お行儀が悪いですよ。どうせ食べるなら一個を全部食べなさい。

五年前、八十本近く植えた葡萄は、柵をしても猿に狙われ、地中からはチガヤという地下茎の根っこにやられ、諦めも肝心と二年かけて友人の長野の畑や、猿の出ない別の畑に移植した。講習会にも参加し、ついに罝わなの免許を取ろうとも思ったがやめた。あちらも罝がしかけられているかもしれない里山を制限付きで生きているならば、こちらも制限つきで猿に取りられない作物だけを育てればいいかと思えるようになっていた。人間が全てをコントロールできる世界ではないことを、畑は教えてくれる。

最近、父からほぼ任されているのが、みかん畑だ。なかなかの広さである上に七十年の老木ということもありメンテナンスに時間も労力もかかる。メンテナンス次第では百年持つ木もあるそうだが、三十年を境に収量が落ちるので伐採されることも多い。

でも、毎日触っているうちに、これまた植物の声が聞こえるようになってくるから不思議だ。「久美子さん、根っこですよ。根っこがもぐらの穴で浮いています」「僕はカミキリムシに幹をやられています」「ここは水が溜まりやすいです。水路を作ってください」。弱っている木には必ず原因があって、本での勉強も必要だけど、根気よく観察することが大事だと感じた。一本一本原因を探り、根の下に通った幾筋ものもぐらの穴を埋めたり、幹や根にできた虫の穴に薬を吹き込み、飛び出してきた虫をキャ

ツチ、潰す。エンガチョ！ となっていたのは最初だけで、慣れてしまった。

「もう少しがんばるんよ」と木に声をかける。根を完全にやられて倒れそうな状況の木にも「もう、こりゃいかんな」と言えないのは、木が聞いているからだ。七十年の木からは苗木や野菜からは聞こえない声が聞こえる。神社の大楠だけでなく老木にはみんな魂が宿っているのを感じる。会話をするのは人間だけではない。東京の近所を散歩するときも、古い木からはそういう声なき声を感じるようになった。

昼、母と持ってきたお弁当を食べる。「こたえたなあ（疲れたなあ）」と言って母が草原に寝転がる。「こたえたなあ」と私も寝転がる。普段、鉛筆かフライパンしか持たない私の手首は、連日の農作業で腱鞘炎っぽくなってきた。おまけに、鋏を振り下ろしたとき地面にぶつかった振動がダイレクトに骨に響くことで、指がまっすぐに伸びなくなってしまった。半年もしていると、みるみる指の関節が太くなった。なるほど、私の手もやがて先輩たちのようになるのか。

祖父母や父母の手が、体のわりに大きくごつごつして指の関節が曲がっていたのは、このためだったのか。近所のおばあちゃん達はみんな腰や指が曲がっていた。何事も職業病があるようだ。農機具が開発されたのは農業の歴史からすると最近のことで、父の若い頃には牛と人がその代わりをしていた。農機具や農薬がおばあちゃん達を解放してくれたものだとも思っている。私は、基本昔ながらの方法で農業をしているけ

れど、時にはそういったものに助けてもらおう選択肢は持っていたい。無理しすぎず、続けられることが一番だと思うから。

こうして畑で過ごしていると体の内に籠もっている灰汁^あが出ていく気がした。私に必要だったのは頭と体を結ぶことだったようだ。文章の世界は、ほぼ私の頭の中だけで完結する。それに対し、農業はお日様のもとへ出て、風を浴び、土を耕し、種を蒔き、数カ月から数年見守りやつと完成する。文章や音楽の場合は徹夜すれば何とかなることもあるが、いくら品種改良が進んでも種から一日でスイカになることはない。でも、一日の台風でゼロになることはある。だからこそ、秋に全国各地で豊年祭が行われるのだ。農業とは、人間の力だけではどうにもならない神事でもあると感じる。身の回りに当たり前にあった点と点がずんずんと繋がって軸になっていく。

今年、新たに数本のみかんの苗木を植えた。実ができるまでに五年はかかるし、たくさん実がつき出荷できるようになる頃、私は五十代になっているだろう。私達が祖父を思い出しながらかみかんを食べるように、ずっと未来で、まさに、「実」を結ぶというドラマティックな世界。だから、荒れた畑の中で多分亡くなった誰かが植えたみかんの木が、蔦に巻かれて弱っているのを見ると放っておけない。今枯れようとしているその木は、数十年前の誰かの希望だ。きっと未来を生きる家族を思いながら植え

たものだったのではないか。

畑を中心とした生活は現代人の時間の流れとはまるで違っていた。十五年間東京に住んだ私が求めたものは、すぐ足元にあった。「農業はバンドに似ている」と友人が言っていたが、太陽や雨や風がバンドメンバーだと思うと合点がいく。誰か一人でもそっぽを向いたら成立しないし、猿や猪っていう対バン相手にめっちゃめっちゃにやられることもある。いつも一人で書いている私にとっては、自分一人ではどうにもならないことが心地よい。調べたら数秒後に結果が出てきてしまう世界だからこそ、数カ月後、数年後まで結果がわからないことをやりたいんだなとも思うのだ。

鍬で土を耕す動作がドラムと似ていると気づいたのは、耕し続けたあとの手指のこわばりがドラムを始めたての頃を思い出すものだったからだ。スティックを振り下ろすとき、初心者の頃はしっかりと持ちすぎて振動がダイレクトに手の骨に伝わり、手指の震えがしばらく止まらなかつた。そのうち、スティックは振り下ろすより、振り上げることの方が重要だと分かるようになり、テコの原理を最大限利用し「叩く」より「落とす」を意識すると、腕の重さだけで無駄なく音を鳴らせた。さらに、打ちつけたときの振動が骨に跳ね返ってこないように、スティックは指で軽く挟むだけにした。振動を外に逃がすためでもあるし、腕の重さを無駄なく太鼓に響かせるためでも

あった。そのためには、どんな軌道でスティックを振り上げるかが重要になってくるので、最終的には骨格の勉強になって、大学の頃は腕の軌道の特訓をよくした。と、まあ根本はアスリートでもあるのだ。

鍬の原理も打楽器と同じで、振り上げることの方が重要だと分かってきた。その後は引力に任せて目当ての位置に刃先を「落とす」だけなのだ。ドラムも鍬も、慣れにくると打点が定まってくる。太鼓を最も響鳴させられる打点。土を最もとらえられる打点。違うことは、鍬の打点は加工されたヘッドではなく大地であるということ。いくら上手くショットが決まっても、たまたま埋まっていた石に刃先が命中してしまつたときや、日照続きの硬い土は、素手でコンクリートを殴つたような反動がビリビリと返ってくる。まさにロックだ。だから、なるべく雨降り後の柔らかい土に種や苗を植えるようにしたら、発芽にも人の体にも良いなと今日も一つ賢くなる。

「農業は、根を詰めてするもんじゃないんよ。今日が駄目なら明日やればいいんじゃないから焦らんとちよつとずつしなよ」

お世話になっておるおじさんがそう言った。それは人の人生そのものじゃないかと思つた。良い時も悪い時も、焦らずくさらず、自分という地球と向き合うこと。ドラムとか執筆が私の枝葉だとすれば、私は根つこの部分をやつと開墾しはじめたのだから。本で知るよりもっと深く物事の原理に触れるような、分かるというより元々備わ

っていたことを思い出す感覚。それは、海外旅行へいくよりも旅であり詩だと感じる。

と、ここまで書くならなぜ完全移住しないの？ ということになる。田舎生活の現実から逃げているだけだと言われても仕方ない。でも、愛媛に完全移住してしまったら農業に全てのエネルギーを注ぎ、私は何も書かなくなるだろう。まだ、書く人ではない。その切替のための二拠点だ。

何より、私にとって東京は離れたいふるさとなっていているということ。私の半分を作ってくれた場所だ。自由で面白くて何歳になっても自分らしくいられる、別の意味で自然体な街。意外とみんな親切だ。いろんな人がいて、いろんな生き方を認め合えるのは、八割以上が私のように地元の人でないからかもしれない。東京には根っこのない人たちが受け入れてくれる土壌が江戸の頃からあって、それは東京の良い伝統なのではないだろうか。無名の作家の展示会、小さな劇場や映画館、ライブハウス、電車で三十分も行けば、そういった新しい芸術や感性に出会えるのも刺激的だ。

両極端な二つの場所を欲しがる私は猿より欲深い生き物だ。愛媛から一カ月ぶりに帰ってきて、新宿で「NOWAR」のプラカードを持つ人々の渦へ入りながら、どちらも現実で、どちらもこの世界を作っている要素だと実感する。これからも振り下ろした痛みをこの手に受け止めながら、耕し、書きたいと思っている。